

風疹ワクチンの接種を希望される方へ

国立感染症研究所 感染症情報センター

1. 風疹とは

風疹は患者さんの飛沫(ひまつ)を介して感染するウイルス感染症で、発疹(ほっしん)、発熱、リン節のはれを特徴とします。潜伏期(感染してから発病するまでの日数)は2~3週間です。

目が赤くなるといった症状がみられることもあります。

通常、子供では3日程度で治る病気ですが、稀(まれ)に、血小板減少性紫斑病(3,000人に1人)、脳炎(6,000人に1人)といった重い合併症(がっぺいしょう)がみられることがあります。

2. 大人が風疹にかかった場合の特徴

関節痛がひどいことも特徴とされています。1週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

3. 妊娠初期に風疹にかかった場合の症状

妊娠初期の女性が風疹にかかると、お腹の赤ちゃんに風疹ウイルスが感染して、先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれる場合があります。感染経路はお子様やご主人、一緒に生活しているご家族からうつることが多いため、ご家族が風疹にかからないよう、ワクチンをうけておくことも大切です。先天性風疹症候群という病気は、生まれつきの心臓病、白内障(はくないしょう)、難聴(なんちょう)といった心臓、目、耳などに色々な組み合わせで障害をもつことがある病気です。

4. 日本における風疹の流行状況

最近、風疹患者さんの数が減ってきていましたが、平成15年頃から16年にかけて、日本の各地で劇的な流行が occurred。これまでの調査から、風疹の流行は初春から初夏にかけて多く、数年くらい続くことが特徴といわれています。毎年1名の報告であった先天性風疹症候群の赤ちゃんも平成16年は10名報告されています。

これらのことから、定期接種の期間を過ぎてしまった方においても、風疹にかかったことがない、風疹ワクチンをうけたことがない方は、妊婦さんを守る、重い合併症をふせぐといった意味で、男性も女性も風疹ワクチンを受けておくことが強くすすめられています。

1. 接種を受けることができない人

1) 妊娠をしている女性および妊娠している可能性がある女性はワクチンを受けることができません。ワクチン接種後は少なくとも2か月間の避妊が必要です。万が一、ワクチンを接種した後に妊娠がわかった場合は、かかりつけの産婦人科の先生にご相談下さい。なお、これまで世界的に見ても、ワクチンによる先天性風疹症候群の患者さんの報告はありませんが、その可能性が否定されているわけではないので、接種前の注意が必要です。

2) ワクチンを受ける3か月以内にガンマグロブリン(血液製剤の一種で、重症の感染症の治療などに使われます)の注射あるいは輸血をうけたことがある人は、免疫が十分にできませんので、接種を受けることを延期する必要があります。また、大量のガンマグロブリンの注射をうけたことがある人は、6か月程度延期する必要があるがあります。

3) 生ワクチン(麻疹、風疹、BCG、ポリオ、水ぼうそう、おたふくかぜ、黄熱ワクチンなど)の後は27日以上、不活化ワクチン(インフルエンザ、三種混合(百日咳・ジフテリア・破傷風)、二種混合(ジフテリア・破傷風)、日本脳炎、A型肝炎、B型肝炎、狂犬病、肺炎球菌ワクチンなど)の後は6日以上接種間隔をあける必要があるがあります。

風疹ワクチンに限ったものではありませんが、

4) 接種直前の体温が37.5°C以上であった人重い急性の病気にかかっている人

5) 風疹ワクチンに含まれる成分(接種医におたずねください)でアナフィラキシーという重いアレルギー反応を起こしたことがある人

6) 接種医が接種しない方がよいと判断した場合には、接種を受けることができません。

2. 接種を受けるときに注意が必要な人(接種にあたっては、かかりつけの先生と相談する必要があります)

- 1) 先天性異常、心臓、腎臓、肝臓、血液、脳神経、発育発達の病気、悪性腫瘍など何らかの病気がある人
- 2) これまでの予防接種で2日以内に発熱がみられた人、またはアレルギーを疑う症状(全身の発疹やじんましんなど)がみられた人
- 3) これまでにけいれんを起こしたことがある人
- 4) これまでに免疫機能に異常(感染症によくかかったり、感染症が重くなったりすることがあります)があると言われたことがある人
- 5) 風疹ワクチンに含まれる成分(接種医におたずねください)でアレルギーを起こすおそれのある人
- 6) 薬や食べ物でアレルギーを疑う症状(全身の発疹やじんましんなど)がみられた人
- 7) 接種当日の体調が普段とちがう人
- 8) 家族や周りで最近1か月以内に麻疹、風疹、水ぼうそう、おたふくかぜにかかったことがある人がいる場合
- 9) 最近1か月以内に何か病気にかかったことがある人

3. 風疹ワクチンの効果

風疹ワクチンを接種することによって 95% 以上の人が免疫を獲得しますので、ワクチンを接種してからであれば、風疹の患者さんと接触してもほとんどの場合発症を予防することができます。しかし、いつまで免疫が持続するかについては、獲得した免疫の状況や、その後の周りでの流行の程度によって異なります。

4. 風疹ワクチンの副反応

接種後の副反応は非常に少ないワクチンといってよいでしょう。風疹ワクチンに限ったことではなくワクチン全般で言われることですが、稀に接種後 30 分以内にアナフィラキシーという重いアレルギー反応を認める方がいますので、接種を受けた後は少なくとも 30 分間、接種を受けた医療機関などで様子を観察しましょう。

子供を対象にしたこれまでの調査では、接種後 5~14 日に発熱 (37.5° C 以上 38.4° C 未満が 1.9%、38.5° C 以上が 2.6%)、発疹 (1.3%)、リンパ節のはれ (0.6%) が報告されています。しかし、通常数日の経過で自然によくなります。

成人女性にワクチンを接種した場合、子供にくらべると、関節痛の頻度が高いと言われていますが、この場合も数日から1週間程度で自然に治ります。

風疹にかかった場合には 3,000 人に 1 人の割合でみられる 血小板減少性紫斑病ですが、ワクチン接種後にも稀 (100 万人に 1 人程度) ではありますが、認められる場合があります。

接種後 2~3 週間は副反応の出現に注意をしましょう。

5. その他注意すること

ワクチンを接種した人の咽頭(のど)から接種 1~2 週間後にワクチンウイルスがでてくることありますが、周りの人にうつることはありませんので、妊婦さんの家族の方が接種を受けられても心配はありません。むしろ、妊婦さんの家族で風疹の免疫(めんえき)をもっていない方は、昨年からの流行を考えると、早めに受けておかれた方が良いでしょう。

予診票はこれまでの様子を知るための重要な情報ですので、正しく記入しましょう。

接種した当日は入浴は可能ですが、接種部位を清潔に保ち、はげしい運動をひかえ、体調をよく観察しましょう。もし、何か気になる症状がみられた場合は接種医に相談しましょう。